

第一章…静寂と、掠れる衣擦れの音

都会の喧騒、そしてシャレーや便利屋68の連中が巻き起こすいつもの馬鹿騒ぎが、遠い異世界の出来事のように思える。

辿り着いたのは、山あいにひっそりと佇む古い温泉旅館だった。

バスを降りてから続く細い上り坂を歩きながら、カヨコは何度も深く息を吸い込んでいた。澄んだ、少し冷たさの混じる空気。彼女のトレードマークである、例の「ブラック・デス・ポイズン」の不気味な骸骨が描かれたパーカーのフードが、風に小さく揺れている。

「……本当に、何も無いところなんだね」

ポツリと、彼女が呟いた。

その言葉に棘はない。むしろ、どこか安堵したような響きが含まれている。

カヨコはいつも、周囲から「怒っている」とか「近寄りたくない」と誤解されがちだ。あのアルたちですら、彼女の微かな表情の変化を読み取るのには苦労しているようだし、街の

連中に至っては彼女と目が合っただけで道を譲る始末。

けれど、俺にはわかつていた。今の彼女の瞳が、驚くほど穏やかに、この静かな景色を慈しんでいることが。

旅館の玄関をくぐると、使い込まれた廊下の床が、キシリ、と心地よい音を立てた。

「いらっしやいませ」

年配の仲居さんに案内され、離れの部屋へと向かう。

カヨコは俺の少し後ろを、音を立てないように静かに歩いていた。

普段の彼女は、便利屋のブレインとして、アルの突飛な思いつきを冷静に軌道修正したり、ムツキの悪戯をいなしたりと、常に神経を尖らせている。けれど今は、その肩の力がわずかに抜けているのが見て取れた。

通された部屋は、十畳ほどの純和室。

窓の外には、夕闇に沈み始めた溪谷が見える。



「……いい部屋」

仲居さんがお茶の用意を終えて退室すると、カヨコは部屋の中央にある座卓に腰を下ろした。

彼女はゆっくりと周囲を見渡し、それから視線を俺へと向けた。

いつもなら、ここで「先生」という呼び声が聞こえるはずだ。

けれど、彼女は何も言わない。ただ、少しでも熱を帯び始めたような瞳で、じっとこちらを見つめている。

「あのさ……」

彼女が口を開く。

「ここに来るまで、ずっと考えてたんだけど。……ここには、私たちが邪魔するものは誰も

いないんだよね。……アルたちも、ヘルメット団も……キヴォトスの面倒なことも、全部」

彼女は立ち上がり、ゆっくりと歩み寄ってきた。

至近距離で、彼女が好んで聴いている重厚なハードロックのCDジャケットから漂ってきそうな、少し尖った、でもどこか甘い香水と、彼女自身の体温が混ざり合った香りが鼻をくすぐる。

「昔はさ……こういう、ちゃんとした場所に来ることも多かったんだ。でも、その時はいつも一人だった。……あるいは、望まない『仕事』の一部として。だから、こんな風に……誰かと二人きりで、何もしなくていい時間を過ごすのって……正直、どうしていいか、わからなくなる」

カヨコは視線を伏せ、自分のパーカーの裾を指先で弄んだ。

その指が、わずかに震えている。

「ねえ……。……笑わないで、聞いてくれる？」



彼女の顔が、ほんのりと赤く染まっていく。

「……浴衣、着せてほしい。……自分でも着れるけど、なんだか、今日は……」

それ以上は言葉にならなかった。

俺は頷き、棚に用意されていた浴衣を取り出した。

カヨコはされるがままに、まずその黒いパーカーを脱ぎ捨てた。

その下に着ていた薄手のカットソーが、彼女の身体のラインを露わにする。

息を呑んだ。

知ってはいたつもりだった。けれど、こうして目の前で、遮るものない距離で見せつけられると、彼女の身体のアンバランスさに圧倒される。

カヨコはスレンダーな体型をしている。手足も長く、モデルのようなシルエツトだ。

けれど、その胸元だけは、驚くほど豊潤だった。

薄い生地を内側から押し上げる、重たげな果実のような膨らみ。

彼女が呼吸をするたびに、その巨大な質量が上下に揺れ、柔らかそうな質感を強調している。

「……何、見てるの」

不機嫌そうな言葉とは裏腹に、彼女の瞳は潤んでいる。

彼女は、自分自身のこの恵まれすぎた身体が、時として周囲の視線を集めすぎてしまうことを知っている。だからこそ、普段はあのダボツとしたパーカーで隠しているのだ。

「……いいよ。……見ても。……今日は、そういうつもりで来たんだから」

彼女の手が、カットソーの裾にかかる。

ゆっくりと、躊躇いがちに、布地が持ち上げられていく。

剥き出しにされたのは、驚くほど白く、透明感のある肌。

そして、その白さを背景にして、さらに強調される二つの巨大な円。

フロントホックのブラジャーが、はち切れんばかりの胸を辛うじて支えていた。

カヨコはそのまま、自分の手でそのホックを外した。

解放された双丘が、自重に耐えかねて、ぽふん、という音が聞こえてきそうな勢いで零れ落ちる。

重力に従い、わずかに形を変えながら下へと垂れるその様は、暴力的なまでのエロティシズムを放っていた。

「……浴衣……早く」

彼女の吐息が熱い。

俺は震える手で、彼女の肩に浴衣を掛けた。

冷たい空気の中で、彼女の熱が指先に伝わってくる。

カヨコの腕を袖に通し、前を合わせようとする。

けれど、彼女の胸があまりに大きすぎて、標準的なサイズの浴衣では、どうしても胸元

が大きくはだけてしまう。

「……入らないね。……困ったな」

彼女は困惑したように、けれどどこか愉しげに、自分の胸を隠そうともせずには笑った。  
俺が無理やり前を合わせようとすると、彼女の豊かな乳房が浴衣の生地を左右に押し広げ、深い谷間をこれでもかかと強調する。

指先が、偶然を装って、その柔らかい膨らみに触れた。

「……あっ」

カヨコの口から、甘い声が漏れる。

「……今……わざとでしょ」



責めるような言葉に、熱い吐息が混じる。

彼女は俺の腕を掴み、そのまま自分の胸へと引き寄せた。

「……いいよ。……もつと、触つて。……旅館の人に呼ばれるまで、まだ時間はあるから」

浴衣越しに、彼女の胸の重みを掌で受け止める。

想像していたよりもずっと、柔らかく、そして温かい。

カヨコは俺の胸に頭を預け、しがみつくように力を込めた。

「……ああ……。……落ち着く……」

窓の外では、夜の帳が完全に下りていた。

溪流のせせらぎだけが聞こえる部屋の中で、俺たちは、温泉に入る前の短い時間を、互いの体温を確かめ合うように過ごした。

カヨコの指が、俺の服の中に忍び込んでくる。



「……まだ、いけないよ。……まだ、準備運動なんだから」

彼女の少し赤らんだ頬が、俺の首筋に擦りつけられる。

ハードな音楽を愛する彼女の、心臓の鼓動もまた、激しく、激しくリズムを刻んでいた。

## 第10章…湯煙に溶ける、甘い共犯

脱衣所の引き戸を開けると、湿り気を帯びた熱気が、一気に肌を包み込んだ。

硫黄の香りが微かに混じる、温泉特有の匂い。

先に浴室へと足を踏み入れた背中を、ぼんやりとした湯気が白く煙らせている。

カヨコは、手にした小さなタオルで胸元を隠すようにしながら、ゆつくりと岩造りの露

天風呂へと歩いていく。

さつき、部屋で浴衣をはだけさせた時の、あの熱っぽい視線のやり取りが、まだ身体の芯に残っているみたいだ。

「……こつち。……誰も、いないみたいだから」

振り返った彼女の頬は、湯気のせいかな、それとも別の理由か、林檎のように赤らんでいた。

夜の帳が下りた露天風呂。

周囲を囲む竹林が風に揺れ、さらさらと乾いた音を立てている。

カヨコは、隠していたタオルをそつと縁に置くと、音を立てないように静かに湯船へと身体を沈めた。



お湯に浸かった瞬間、ふわりと。

彼女の豊かな乳房が、浮力によってさらにその存在感を増し、水面にゆらゆらと浮かび上がる。

白く、透き通るような肌。

お湯に濡れて、しっとり艶を帯びた肩のライン。

「……はぁ……。……あつたかい……」

ふう、と。

彼女の唇から、重く甘い吐息が零れ落ちる。



俺もその隣へと腰を下ろすと、カヨコは吸い寄せられるように、こちらの肩に自分の身体を預けてきた。

お湯の中で、彼女の太ももが、俺の足に触れる。

ヌルリとしたお湯の感触以上に、彼女の肌の滑らかさが、ダイレクトに伝わってくる。

「……ねえ。……もつと、近くに来て」

掠れた声。

彼女は、俺の首筋に腕を回すと、そのまま顔を近づけてきた。

濡れたまつ毛が、至近距離で震えている。

重なり合う吐息。



どちらからともなく、唇が触れ合った。

最初は、羽が触れるような、軽い確認のようなキス。

けれど、カヨコが喉の奥で「ん……っ」と小さな声を漏らした瞬間、それは深く、濃密なものへと変わっていく。

お互いの舌が絡み合い、お湯の音だけが響く空間に、じゅるり、と卑猥な粘着音が混ざり始める。

「……………んむ……………はあ……………っ、ふ……………」

何度も角度を変えて、貪るように。

彼女は、まるで酸素を求めるように俺の口内に舌を這わせ、同時にその身体をさらに強

く押し付けてきた。

水面下で、彼女の巨大な胸が、俺の胸板に押し潰される。

柔らかくて、でも確かな重量感を持ったその感触が、理性をじりじりと削り取っていく。

俺の手は、自然と彼女の腰から、その背中、そして脇へと這い上がっていった。

「……………あつ……………んん……………」

キスを解いたカヨコが、俺の肩に顔を埋め、熱い息を吐き出す。

俺の掌は、ついにお湯の中に漂う、その大質量を捉えた。

——大きい。



片手では到底収まりきららない、溢れんばかりの肉の塊。

お湯の熱を吸い込んで、驚くほど熱を帯びている。

指先を立てて、その柔肉に深く沈めると、カヨコの身体がビクンと大きく跳ねた。

「……………あ……………っ……………それ……………っ、はあ……………」

彼女の指が、俺の背中に爪を立てる。

下から持ち上げるようにして、その重みを手の平で量る。

柔らかい。

どこまでも、どこまでも柔らかい。



けれど、その中心にある乳輪のあたりを、親指の腹でなぞるように刺激すると、彼女は「ひう……っ！」と短い悲鳴を上げて、仰け反った。

月明かりの下、露わになった彼女の胸元。

お湯から出た乳房の頂点が、寒暖差と刺激のせいで、ピンと赤く尖っている。

「……だめ……そんなに……っ、捏ねられたら……っ」

カヨコの声が震えている。

普段の冷静な彼女からは想像もつかないような、情熱的で、無防備な表情。

俺はさらに力を込め、その豊かな胸を両手で挟み込むようにして、中央へと寄せた。

深すぎるほどの、そして白すぎるほどの谷間が形成される。



そこに顔を埋めると、温泉の匂い以上に、彼女の雌としての芳醇な香りが、脳を麻痺させるように漂ってきた。

「……………ん……………つ、ふふ……………。……………そんなに、気に入ったの……………？」

彼女の手が、俺の後頭部を優しく包み込み、自分の胸へとさらに深く押し付けた。

「……………いいよ。……………好きなだけ……………。……………今は、私だけのものなんだから……………」

甘えるような、慈しむような言葉。

俺は、その尖った先端を、唇でそつと含んだ。

「……………あ……………つ、ああ……………っ！」



カヨコが腰を浮かせ、しがみついてくる。

舌の先で転がし、軽く歯を立てるたびに、彼女の喉からは、甘く、切ない喘ぎが零れ続ける。

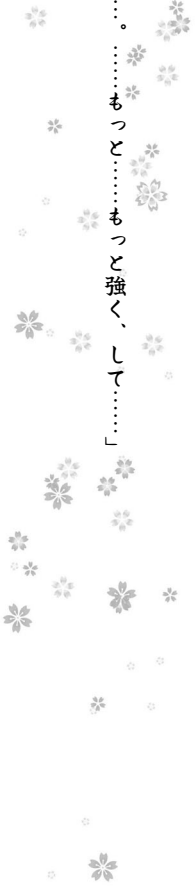
「……はあ……っ、ん、んん……っ！……すごい……っ、吸われてる……っ」

まるで赤ん坊に母乳を分け与える母親のように、彼女は俺の頭を抱きしめ、交互にその乳房を差し出してくる。

吸い付くたびに、ちゅば、ちゅば、という濡れた音が、静かな露天風呂に響き渡る。

彼女の胸は、まるで命の源であるかのように温かく、そして底知れない包容力に満ちていた。

「……ふふ……。……もっと……もっと強く、して……」



カヨコの瞳が、熱に浮かされたように虚空を彷徨う。

彼女の細い腰が、お湯の中で落ち着きなく揺れている。

俺の固くなった部分が、彼女の腹部に何度も触れ、そのたびに彼女は「…………んっ、あ…………」と、期待に満ちた声を漏らした。

「…………ここでは、これ以上は…………。…………ねえ、もう…………」

彼女は、上目遣いにこちらを見つめ、唇を微かに震わせた。

「…………部屋に、戻ろ?…………もつと、ちゃんと…………感じたいから…………」

お湯から上がったカヨコの身体は、夜風にさらされて、微かに震えていた。



タオルで拭う間ももどかしく、彼女は俺の手を強く握りしめる。

その掌は、まだ驚くほど熱かった。

濡れたままの髪から滴る水滴が、彼女の胸の谷間を伝い、床に落ちていく。

俺たちは、言葉を交わすことも忘れ、ただ互いを求める本能のままに、脱衣所を抜けて部屋へと急いだ。

第〇章..シーツに沈む熱、奉仕する純情

障子越しに差し込む月明かりだけが、薄暗い部屋を頼りなく照らしている。

すでに敷かれていた真新しい布団の上に、もつれ込むようにして倒れ込んだ。



カヨコの少し乱れた呼吸が、静寂な空間に甘く響く。

温泉の熱で上気した肌は、薄暗がりの中でもはつきりと分かるほどに桜色に染まっていた。半ばはだけた浴衣からは、あの暴力的なまでに豊かな双丘が零れ落ちそうになっていた。

「……………はあ……………つ、ん……………ねえ、もう……………」

彼女は仰向けの俺の胸にすり寄ると、その細く白い指先を、ゆつくりと、けれど躊躇いのない動作で浴衣の合わせ目へと滑り込ませてきた。

ひんやりとした外気に触れた指先と、俺自身の熱を持った肌。

その温度差に、思わず背筋が震える。

「……………すごく、熱くなってる……………。……………ふふ……………」



布越してはなく、直接触れられたソレは、彼女のひんやりとした掌の中で、ピクンと大きく脈を打った。

カヨコは悪戯っぽく微笑むと、上目遣いでこちらを見つめながら、その手をゆつくりと上下に動かし始める。

「……………ん……………つ。……………これ、気持ちいい……………？」

普段の、どこか気急げでクールな彼女からは想像もつかないような、甘く、媚びるような声色。

細くしなやかな指が、硬く張り詰めた熱の芯をなぞり、そっと包み込む。

そして、絶妙な力加減でじこき上げられるたびに、脳髓を痺れさせるような快感が波のように押し寄せてきた。



「……あつ……はあ……っ。……すごい、ビクビクしてる……。……もつと、してほしい……。？」

彼女自身の吐息も荒くなっている。

手で触れているだけなのに、彼女の太ももがモジモジと擦れ合い、浴衣の裾から覗く白い足がシーツを掻き捲っていた。

カヨコは、俺の反応を確かめるように何度も視線を絡ませると、不意にその動きを止めた。

そして、四つん這いになるような体勢で、ゆっくりと顔を沈めていく。

「……ん……ちゅっ……」

先端に、柔らかな唇が触れた。



ぞくり、と電流が走ったような感覚。

カヨコは自分の長い前髪を耳に掛けると、そのまま熱を帯びた吐息を吹きかけ、そっと舌先を這わせた。

「……………れる……………つ、ちゅぶ……………つ、んむ……………」

湿り気を帯びた、ひわいな水音が静かな部屋に響き渡る。

彼女の温かくて滑らかな口腔内が、俺の昂ぶりをゆっくりと飲み込んでいく。

便利屋のブレインとして、いつも冷静に状況を見極め、的確な判断を下す彼女。

そんな彼女が今、ただ純粋な奉仕の喜びに身を委ね、夢中の表情で俺の下半身に顔を埋めている。



その背徳感と優越感が、快感をさらに何倍にも膨れ上がらせた。

「……………じゅぶ……………っ、ん、ちゅっ……………はぁ……………っ。……………おいしい……………」

時折、顔を上げて糸を引く唾液を舐め取りながら、彼女は恍惚とした瞳で微笑む。

そして、再び深く啞え込むと、今度は喉の奥まで使って、激しくしごき上げ始めた。

「……………んぐっ……………じゅる……………っ、ちゅぼっ……………!!……………んんっ……………!!」

首を前後に振るたびに、彼女の巨大な胸が、重力に逆らえずにブルンブルンと大きく揺れる。

浴衣から完全に飛び出したその白い肉塊は、彼女が動くたびに形を変え、視覚的にも理性を激しく揺さぶってくる。



「……カヨコ……ちょっと、待って……」

あまりの快感に限界が近づき、俺はたまたま彼女の肩を掴んで動きを止めた。

口から離れたカヨコは、ぼかんとした表情でこちらを見上げ、唇の端からきらきらと光る唾液の糸を垂らしている。

「……だめ……？……もう、出そう……？」

彼女の吐息が荒い。

その目は、完全に欲情に染まりきっていた。

「……なら……次は、これ……使って……」



カヨコはそう言うと、自らの両手で、あの規格外に巨大な双丘を下から鷲掴みにした。  
むにっ、と柔らかい音がして、ただでさえ深い谷間が、さらに圧縮されて一本の線になる。

彼女はそのまま身体を乗り出し、俺の熱く硬ざわったソレを、その豊潤な谷間の底へと沈み込ませた。

「……………あっ……………んっ……………！……………すごく、熱い……………っ」

熱い肌と肌が密着し、逃げ場を失った熱が、彼女の柔肉に完全に包み込まれる。

カヨコは、両側から胸を力いっぱい押し潰すようにして、ゆっくりと身体を上下に動き始めた。

「……………んっ……………あ……………っ……………！……………擦れて……………っ、私の方も……………おかしくなりそう……………っ」

ヌチャ……ブチャ……と、先ほど塗りたくられた唾液が潤滑剤となり、胸の谷間から極上の水音が鳴り響く。

極上のシルクよりも滑らかで、どんなクッションよりも柔らかい、圧倒的な質量の暴力。

その奥深くで擦り上げられる感覚は、手や口とはまた違う、頭がおかしくなるほどの快楽だった。

「……はあっ……ん、んっ……!!……どう……?……気持ちいい……?」

カヨコの顔が、苦しげに、けれどこの上なく幸せそうに歪む。

彼女自身も、胸を擦り合わされる刺激で感じているのか、こぼれ落ちる喘ぎ声がどんどん甘く、高くなっていった。



「……昔から、ずっと……邪魔だなんて、コンプレックスだったのに……っ」

彼女は泣き出しそうな、蕩けた笑顔を見せる。

「……今は……こんなに大きくて……よかったって……心から、思う……っ！……もっど……  
いっぱい、こすりつけて……っ」

激しさを増すストローク。

視界いっぱいに揺れる白い乳房と、甘ったるい匂い、そして鼓膜を震わせる卑猥な水音と彼女の喘ぎ声。

すべての感覚が臨界点を突破しようとしていた。

「……カヨコ……っ、もう、出る……っ！」



限界を悟り、そう叫んだ瞬間。

カヨコは胸での奉仕をピタリと止めると、すかさず顔を近づけ、弾け飛びそうになっていた先端を、再びその柔らかな唇でパクリと啜え込んだ。

「……………んっ……………いいよ……………っ……………全部、頂戴……………っ」

彼女の目が、力強くそう語りかけている。

次の瞬間、抗いようのない絶頂が訪れ、俺は彼女の温かい口腔内へと、熱く、濃密な愛の飛沫を限界まで解き放った。

「……………んぐっ……………!!……………んむ……………っ、こくっ……………こくっ……………」

カヨコの細い喉が、大きく波打つ。



彼女は一滴残らず受け止めるように、俺が放ったすべてを、音を立てて飲み込んでいった。

「……………ぶはっ……………はぁ……………っ、はぁ……………っ」

ゆっくりと口を離れたカヨコは、乱れた呼吸を整えながら、シーツに手をつけて倒れ込む。

口の周りを汚し、頬を真っ赤に染め上げた彼女は、今まで見たどんな姿よりも色っぽく、そして愛おしかった。

「……………んっ……………ちゅ……………。……………えへ……………全部、飲んじゃった……………」

カヨコは舌なめずりをして、ぼつりと呟く。

「……………すごく、濃くて……………熱かった……………。……………これが、全部……………私の中に入ったんだね……………」

彼女は愛おしそうに俺の胸に頬を擦り寄せると、安心しきったような、甘い吐息を漏らした。

まだ夜は長い。

窓の外の静かな風の音すらも、今の俺たちには、二人だけの甘い時間を彩るBGMに過ぎなかった。

第4章…溶解する輪郭、共鳴する熱

部屋を包むのは、静寂と、濃密に絡み合う二人の熱。

先ほど、俺が放ったすべてを飲み干したカヨコは、そのまま俺の胸元に顔を埋めていた。



荒い呼吸が、直接肌に吹き付けられる。

彼女の口元から、一筋、白く濁った名残が零れ、月明かりを反射して真珠のように輝いた。

普段の彼女なら、すぐに冷静になって、少し呆れたような顔で「……ふう」と溜息をつくのかもしれない。

アルの突飛な行動を冷めた目で見つめる、あの「便利屋68の課長」としての彼女なら。

けれど今、俺の腕の中にいるのは、そんな鎧をすべて脱ぎ捨てた、ただ一人の、熱に浮かされた女だった。

「……つ、ふ……はぁ……」

カヨコが、ゆっくりと顔を上げる。



汗で額に張り付いた髪の間から覗く瞳は、完全に潤み、焦点が定まっていない。

彼女は、俺のモノから口を離れた後も、その余韻を慈しむように自分の唇を舌でなぞった。

「……………先生。……………全部、入ってきた。……………お腹の底まで、すごく熱い……………」

掠れた、震える声。

彼女は、俺の胸板に広がる汗を、自分の白い指先でなぞりながら、どこか夢遊病者のような手つきで這わせていく。

「……………不思議だね。……………こんなに、心臓がうるさい……………。……………イヤホンで、一番激しいデスメタルを聴いてる時より……………ずっと、激しい……………」



カヨコは、少しだけ自嘲気味に、けれどこの上なく幸せそうに微笑んだ。

彼女の視線が、再び俺のモノへと向けられる。

一度果てたはずのそれは、彼女の視線と、漂う甘い匂いに当てられて、再び脈打ち始めていた。

「……まだ、終わらせないよ……。……先生が、私を……。……こんなにしたんだから……」

カヨコは、這いずるような動作で、俺の体の上に跨った。

浴衣はとうに肩から滑り落ち、腰のあたりで辛うじて止まっている。

露わになった彼女の身体は、驚くほど白く、そして病的なまでに美しかった。

特に、その胸。



彼女が動くたびに、重力に従って、ずっしりとした質量が揺れる。

カヨコは、自らの手で、その巨大な乳房を左右からギュッと寄せた。

むに、という、柔らかい肉同士が密着する音が、静かな部屋に響く。

彼女の細い体軀には不釣り合いなほどの、圧倒的なボリューム。

形成された深い、深すぎる谷間の間に、俺の昂ぶりをゆつくりと、沈ませていく。

「……………ん……………っ！……………あ、ああ……………っ……………熱い……………」

カヨコの口から、熱い吐息が零れる。

温泉の熱を蓄えた彼女の肌は、驚くほど滑らかで、吸い付くようだった。



彼女は、俺のモノを両側から乳房で挟み込み、力を込めて押し潰す。

そのまま、腰を前後に揺らし、胸の肉だけで俺をしごき始めた。

ヌチャ……、グチュ……。

先ほど塗りたくられた唾液と、彼女自身の汗が潤滑剤となり、卑猥な水音が、彼女の胸元から鳴り続ける。

「……ふ……はぁ……っ、ん、んん……っ！……先生……っ、見て……。……私の、こんなところで……っ、先生が……っ」

カヨコの顔が、快樂で歪む。

自分の胸が、俺のモノに擦り潰され、形を変えていく様を、彼女は恍惚とした瞳で見つ

めていた。

時折、先端が彼女の顎や、鎖骨のあたりを打ち、白い肌に赤い筋を引いていく。

俺は、その揺れる柔肉を、下から強く鷲掴みにした。

「……………ひう……………つ、あ、ああ……………つ！……………強く……………つ、もつと……………つ！」

指先が、深い肉の海に沈み込む。

驚くほど柔らかく、けれど芯には確かな熱量を持った、彼女の象徴。

それを力任せに捏ね回すと、カヨコは声を枯らして喘ぎ、俺の首筋に顔を埋めて、甘噛みしてきた。

「……………先生……………つ、私……………つ。……………昔は、ここに来て……………ただ、静かなだけだった……………。……………」

でも、今は……先生の声と……っ、この音が、頭の中を……ぐちゃぐちゃにする……っ！」

激しさを増すピストン。

カヨコの豊かな乳房が、俺の顔を、身体を、叩きつけるように揺れる。

視界が、彼女の白さと、微かに漂う石鹸と、そして彼女自身の雌としての香りて埋め尽くされた。

「……カヨコ……っ、もう、出る……っ！」

俺が限界を告げると、カヨコは「……んっ……」と、さらに強く、その胸で俺を締め付けた。

「……いいよ……っ。……ここに……っ、私の……全部に……っ、ぶっかけて……っ！」



腰を激しく突き上げると同時に、俺は彼女の白く、豊かな胸の谷間に、今日何度目かの、熱く濃密な愛の飛沫を限界まで解き放った。

「……………あ、あああ……………っ、んんん……………っ！」

ドクドクと脈打つたびに、彼女の胸元が白く汚されていく。

カヨコは、それを受け止めきろうとするように、さらに強く胸を寄せ、自分の肌に染み込ませようとしていた。

しばらくの間、荒い呼吸だけが重なり合う。

カヨコは、自分の胸についたそれを、指で掬い取った。

「……………あ……………真っ白……………ふふ……………汚い、はずなのに…………………………すごく……………綺麗に見える……………」



彼女は、その指をゆつくりと口に含み、絡めとるように舐めとった。

そして、まだ熱の冷めない瞳で、俺を見つめる。

「……………ねえ……………これだけで、終わるつもりじゃないよね……………？」

彼女は、腰を浮かせ、浴衣を完全に脱ぎ捨てた。

月の光を浴びて浮かび上がる、細い腰ライン。

そして、その奥にある、湿り気を帯びた、彼女の最も秘められた場所。

「……………先生……………私の中……………もう、ずっと前から……………先生を待ってるの……………」

彼女は、自らの手で、その秘処を押し広げた。



そこからは、既に彼女自身の愛液が、蜜のように溢れ出し、太ももを伝ってシーツを汚している。

「……………入れて……………。……………孤独だった、私を……………。……………先生で……………いっぱい、して……………」

カヨコは、俺の手を自分の太ももへと導き、優しく、けれど拒むことを許さない強さで、俺を自分の内側へと誘った。

俺は彼女を抱き上げ、ゆっくりと、その熱い奥深くへと沈み込んでいく。

「……………あ……………っ、あああ……………っ！……………先生……………っ！」

結合した瞬間、カヨコの身体が大きく弓なりに反った。

中から、締め付けるような、熱い愛撫。



温泉で温まった彼女の膣内は、驚くほど柔らかく、そして食欲に俺を飲み込んでいく。

「……………はあ……………つ、はあ……………つ。……………入ってる……………。……………先生が……………私の中に……………つ」

カヨコは俺の肩に爪を立て、しがみついてくる。

一步、一步、深淵へと踏み込むように、俺は腰を動かし始めた。

グチュ……………、グチュ……………。

体液が混ざり合い、重なり合う音が、部屋の静寂を完全に殺していく。

「……………んっ……………あ……………つ、ああ……………っ……………そこ……………つ、だめ……………つ、頭が……………っ、白くなる……………っ！」



彼女の巨大な胸が、俺の動きに合わせて、激しく上下に揺れる。

俺はその乳房を再び掴み、今度はそのまま、彼女を仰向けに押し倒した。

シーツに沈み込む、カヨコの白い肌。

俺は彼女の足を高く持ち上げ、さらに深く、彼女の限界を暴くように突き入れた。

「……………あつ……………!!……………ああああ……………つ、ん、んん……………っ!」

カヨコの声が、もはや言葉にならない、獣のような喘ぎへと変わっていく。

彼女の意識は、快楽の渦に飲み込まれ、ただ俺という存在を、全身で受け止めることだけに集中していた。

便利屋の課長としてのプライドも、クールな佇まいも、すべてはこの瞬間の熱に溶けて

消えた。

「……先生……っ、先生……っ！……愛して……っ、もっと……っ、もっと私を……っ！」  
激しさを増す衝撃。

カヨコは、俺の首に腕を回し、何度も何度も、貪るようにキスを求めてきた。

舌を絡ませ、互いの唾液を交換し合いながら、俺たちは狂ったように腰を振り続ける。

すべての境界線が曖昧になり、ただ「一つ」であることだけが、この世界の真実だった。

「……カヨコ……っ、もう、限界だ……っ！」

俺の咆哮に合わせるように、カヨコもまた、絶頂の淵へと手をかけた。



「……………あ……………つ、あああ……………つ！……………私も……………つ、私もいく……………つ！……………先生……………つ、先生……………つ！！！」

彼女の膣内が、嵐のような、猛烈な痙攣を起こす。

俺は、彼女の最も奥深く、子宮の入り口を叩くようにして、熱く、濃密な愛のすべてを、一滴残らず流し込んだ。

「……………あ……………つ！！！」

カヨコは大きく目を見開き、そのまま、意識を飛ばすようにして脱力した。

部屋には、二人の荒い息遣いと、汗の匂いだけが残された。

俺は、彼女の顔に、最後に溜まっていたモノを解き放った。



白い飛沫が、彼女の頬、額、そして唇に降り注ぐ。

「…………ふ…………はあ…………」

カヨコは、ゆっくりと瞬きをすると、顔についた精液を、煩わしそうにするどころか、愛おしそうに手で拭った。

「…………顔まで…………。…………本当に、容赦ないんだね…………先生は…………」

彼女は、少しだけ悪戯っぽく、けれど深い愛着を込めて微笑んだ。

その顔は、真っ白に汚れ、ひどく乱れていたけれど。

今の彼女は、キヴォトスのどの少女よりも、美しく輝いて見えた。



第○章…朝焼けの温度、響き合う心

乱れたシーツの上、重なり合ったままの肌から伝わる鼓動は、まだ激しく、そして心地よい余韻に震えていた。

部屋の空気は、二人の汗と体温、そして愛の痕跡が混じり合い、逃げ場のないほどに濃密に煮詰まっている。

カヨコは、俺の腕の中に顔を埋めたまま、時折「……ん」と小さく鼻を鳴らして、甘えるように身体を擦り寄せてきた。

さつきまでの、あの狂おしいほどの情事。

冷静な彼女が、声を枯らして、泣き出しそうな瞳で俺を求めてきた姿が、まだ脳裏に焼き付いて離れない。



「……………はあ……………。……………ねえ、起きてる……………?」

カヨコが、ゆっくりと顔を上げる。

汗で濡れた髪が頬に張り付き、その隙間から覗く瞳は、どこか遠くを見つめるように潤んでいた。

彼女は、俺の胸元にそっと手を置く。

細い指先が、肌をなぞるたびに、微かな熱がそこから広がっていく。

「……………不思議……………。……………あんなに、めちやくちやにされたのに……………。……………まだ、身体の奥が……………  
じんじんして……………熱が、引かない……………」

彼女の吐息が、鎖骨のあたりに吹きかかる。



カヨコは、そのまま俺の上に這い上がってくると、再びその巨大な双丘を俺の胸板に押し付けた。

押し潰され、横へと大きく広がるその肉感。

重力に従い、どっしりとした重みが俺を圧迫する。

「……見て。……また、こんなに……」

彼女が、上目遣いで微笑む。

一度果てたはずの俺の昂ぶりが、彼女の肌の柔らかさと、その淫靡な誘いに応じるように、再び力強く脈打ち始めていた。

「……ふふ……。……いいよ。……夜が明けるまで、まだ、時間はあるから……」



カヨコは、自らの手で俺のモノを握ると、ゆっくりと自分の秘処へと導いていく。

そこは、先ほど放った精液と、彼女自身の愛液で、ぐちゃぐちゃに濡れそぼっていた。

「……………あ……………っ、ん、んん……………っ！」

再び、結合する。

二度目の結合は、一度目よりもずっと、吸い付くように深く、密接だった。

カヨコは俺の肩に顔を埋め、背中に爪を立てて、必死にその熱を飲み込んでいく。

「……………はあ……………っ、はあ……………っ！……………これ……………っ、さっきよりも……………ずっと……………っ、奥まで……………くる……………っ！」

彼女は、俺の腰を力いっぱい脚で挟み込み、離さないようにしがみついてくる。



俺が腰を突き上げるたびに、カヨコの巨大な乳房が、波打つように激しく揺れた。

その白く、豊潤な柔肉が、俺の腹部や胸に何度も叩きつけられ、極上のクッションのような感触を与えてくれる。

「……………んあつ……………!!……………あああ……………っ、ああ……………っ!!」

重なり合う水音は、先ほどよりもさらに卑猥に、激しく、部屋の静寂を塗り潰していく。

カヨコの声は、もう形を成さない。

ただ、溢れ出す快楽に身を任せ、ひたすらに俺の名を呼ぶ代わりに、その身体を震わせることで、自分を、すべてを、俺へと預けていた。

「……………ああ……………っ、すごい……………っ!!……………中、すごく……………っ、熱いの……………っ!!……………溶けちゃ

う……っ、全部……っ！」

彼女の中は、まるで俺を閉じ込めようとするかのように、うねり、締め付けてくる。

孤独だった彼女の過去を、今この瞬間、俺の熱が、俺のすべてが、力ずくで書き換えていくような。

そんな、暴力的で、けれどこの上なく優しい、魂の混じり合い。

「……もつと……っ、もつと奥まで……っ！……もつと……っ、もつと強く……っ！」

カヨコの瞳に、涙が浮かぶ。

それは悲しみではなく、あまりに巨大な多幸感に、彼女の心が耐えきれずに溢れ出したものだ。



俺は彼女の腰を掴み、限界まで引き寄せると、その最深部へと何度も、何度も、魂を刻むように突き入れた。

「……………あ……………つ、ああ……………つ！……………いく……………つ、いつちやう……………つ！……………ああああ……………つ！！」

カヨコが、絶叫に近い喘ぎ声を上げ、身体を大きく弓なりに反らせた。

中が、嵐のような激しさで、俺を締め付ける。

俺も、もう我慢ができなかった。

「……………つ！！……………カヨコ……………つ！！」

彼女の最も奥深く、まだ熱の残る場所へ、俺は今日一番の、濃密で熱い愛の奔流を、一滴も残さず流し込んだ。



「……………あ……………っ！」

カヨコは、目を見開き、そのままガクガクと身体を痙攣させながら、俺の胸へと倒れ込んできた。

中から溢れ出す熱。

それが、彼女の膣内を内側から満たし、彼女のすべてを、俺の色で染め上げていく。

「……………はあ……………っ、はあ……………っ、はあ……………っ……………」

しばらくの間、二人は言葉もなく、ただ重なり合ったまま、乱れた呼吸を整えていた。

やがて、カヨコがゆっくりと口を開く。

「……………あ……………。……………すこく……………っ、いっぱい……………出た……………。……………お腹の中……………パンパン……………」



だよ……」

彼女は、少しだけ苦しげに、けれどこの上なく満足そうに微笑んだ。

彼女の肌は、今や汗と、俺たちの愛の証で、きらきらと光り輝いている。

「……ねえ……。……すごく……。気持ちよかった……」

カヨコは、俺の首筋に顔を埋め、囁くように言った。

「……私……。こんなに、誰かと……。『繋がってる』って……。感じたの……。初めて……。……  
今なら、何が起きても……。怖くない……。……本当に……。大好き……。……」

彼女は、俺の手を取り、自分の左胸へと導いた。

豊かな膨らみの奥で、激しく、力強く打つ鼓動。



それが、俺の掌へとダイレクトに伝わってくる。

「……聞こえる……？……私の、本当の音……。……これ……。全部……。あなたの、ための音なんだよ……」

窓の外が、微かに白み始めていた。

山あいの静かな夜が明け、新しい一日が始まるうとしている。

カヨコは、俺の胸に寄り添いながら、ゆっくりと目を閉じた。

そこにはもう、孤独な一人の少女はいなかった。

あるのは、ただ一人の、愛する人と一つになった、穏やかで、幸福な一人の女性の姿だった。



朝焼けの光が、部屋に差し込む。

二人の物語は、ここからまた、新しく、そして永遠に続いていくのだ。

エピソード…骸骨の紋章と、静寂の続き

便利屋68の事務所は、今日も今日とて騒がしい。

「いい、みんな！ 次こそは完璧なアウトローとしての第一歩を刻むわよ！ まずはこの、ええと……とにかく凄そうな依頼を完遂させるわ！」

アルが、いつものように根拠のない自信に満ちた声を張り上げている。

その隣で、ムツキは「くふふ、また失敗しなきゃいいけどね」と面白そうに笑い、ハル

カは「アル様の邪魔をするものは、私が……私がすべて排除します！」と、物騒なものを構えようとしていた。

カヨコは、そんな彼女たちを少し離れたソファから眺め、深いため息をつく。

「……アル、声大きい。少しは落ち着いて」

呆れたような、いつもの低いトーン。

ブラック・デス・ボイズンの骸骨が描かれた、少しオーバーサイズのパーカー。

周囲から「怖い人」だと誤解される原因でもあるその姿は、俺にとっては、あの温泉の夜にすべてを曝け出した、愛おしい女性の鎧にしか見えなかった。

ふと、カヨコと目が合う。



彼女は一瞬だけ、唇の端を微かに揺らした。

それはアルたちには決して読み取れない、二人だけの秘密の合図。

——後で、いつもの場所です。

言葉にせずとも伝わってくるその温度に、俺の胸が高鳴った。

深夜。

誰もいなくなったシャーレの執務室に、小さなノックの音が響く。

扉を開けると、そこにはパーカーのフードを深く被ったカヨコが立っていた。

「……こんな時間まで仕事？ ……無理すぎ」



彼女はそう言いながら中に入ると、カタン、と背後で鍵を閉めた。

その瞬間、事務所で見せていた「便利屋の課長」としての冷徹な空気は、霧が晴れるように消えていく。

「……………あのさ。……………温泉から帰ってきてから、ずっと……………」

カヨコがフードを脱ぐ。

汗ばんだような熱を帯びた瞳が、まっすぐに俺を射抜いた。

「……………ずっと、足りなかった。……………思い出せば思い出すほど、ここが、疼いて……………」

彼女は自分のパーカーの裾を掴み、ゆっくりと持ち上げる。

その下には、何も着ていなかった。



溢れ出すように露わになった、白く、重たげな双丘。

温泉の時よりも、さらに成熟した果実のように、ずっしりとした存在感を放っている。

「……………。……………まずは……………これ、させて」

カヨコは膝をつき、俺の前に跪いた。

細い指が、俺のベルトに掛かる。

「……………はあ……………っ、ん……………。……………すごく、熱くなってる……………。……………私のこと、考えてたんでしょ？」

彼女は、俺の昂ぶりを露わにすると、その熱量を確かめるように掌で包み込んだ。



そして、ゆっくりと顔を近づけ、先端を舌先で転がす。

「……………れる……………つ、ちゅぶ……………んっ……………」

静かな部屋に、卑猥な粘着音が響き渡る。

カヨコは目を閉じ、陶醉しきった表情で、俺のモノを深く、深く、喉の奥まで飲み込んでいった。

「……………んぐっ……………じゆる……………んむっ……………!!……………はぁ……………っ、ふ……………」

時折、上目遣いにこちらを見つめ、糸を引く唾液を飲み込む。

ハードロックを愛する彼女の、激しく打つ鼓動が、俺の脚に伝わってくる。

「……………もっど……………熱く、して……………。……………次は、私の……………これで……………」





カヨコの喘ぎ声が、どんどん高くなっていく。

彼女は俺の腰を強く掴み、自分の方へと引き寄せる。

「……だめ……っ、もう、我慢できない……っ。……中……っ、入れて……っ！」

カヨコは、俺を執務机の上に押し倒すと、自分からその上に跨った。

露わになった彼女の秘処は、すでに自分の愛液で、ぐちゃぐちゃに濡れそぼっている。

ゆっくりと、結合する。

「……ああああ……っ、ん、んんん……っ！」

結合した瞬間、カヨコの身体が激しく震えた。



温泉の時よりもずっと、吸い付くように熱い、彼女の内側。

俺のモノを、奥の奥まで貪り、閉じ込めようとする。

「……………はあ……………っ、はあ……………っ！……………入った……………。……………全部……………私の中に……………っ」

カヨコは俺の首に腕を回し、激しく腰を振り始めた。

上下にバウンドするたびに、彼女の巨大な乳房が、暴力的と言っていいほどの勢いで揺れ、形を変える。

俺はその乳房を両手で掴み、さらに深く、彼女の限界を暴くように突き入れた。

「……………あっ……………！……………ああああ……………っ、ん、んん……………っ！……………そこ……………っ、だめ……………っ、頭  
が……………っ、白くなる……………っ！」



グチュ……グチュ……と、体液が混ざり合う、卑猥な音が部屋を支配する。

カヨコは、普段の冷静さなど一欠片も残さず、狂ったように腰を振り続けた。

「……もつと……っ、もつと……奥まで……っ！……私を……っ、先生で、いっばいに……して……っ！」

激しさを増す衝撃。

カヨコは、俺の首筋に顔を埋め、甘噛みしながら喘ぎ声を上げた。

孤独だった彼女の過去を、今この瞬間、俺の熱が、俺のすべてが、力ずくで溶かしていく。

「……カヨコ……っ、もう、出る……っ！」

限界を悟り、俺が叫んだ瞬間。



カヨコもまた、絶頂の淵へと手をかけた。

「……………あ……………つ、あああ……………つ！……………私も……………つ、私もイ……………つ！……………全部……………つ、全部頂戴……………つ！！」

彼女の膺内が、嵐のような、猛烈な痙攣を起こす。

俺は、彼女の最も奥深くへと、熱く、濃密な愛のすべてを、一滴残らず流し込んだ。

「……………あ……………つ！！」

カヨコは大きく目を見開き、そのまま、意識を飛ばすようにして俺の胸へと倒れ込んできた。

中から溢れ出す熱。



それが、彼女の膣内を内側から満たし、彼女のすべてを、俺の色で染め上げていく。

「……………はあ……………っ、はあ……………っ、はあ……………っ……………」

しばらくの間、二人は言葉もなく、ただ重なり合ったまま、乱れた呼吸を整えていた。

やがて、カヨコがゆっくりと顔を上げる。

「……………あ……………。……………すごく……………っ、いっぱい……………出た……………。……………お腹の中……………パンパン……………だよ……………」

彼女は、少しだけ苦しげに、けれどこの上なく満足そうに微笑んだ。

口元に微かに残る唾液を拭い、彼女は俺の頬をそっと撫でる。



「……………ねえ……………すごく……………気持ちよかった……………」

カヨコは、俺の胸に頬を擦り寄せ、囁くように言った。

「……………私……………こんなに、誰かと……………『繋がってる』って……………感じたの……………初めて……………  
今なら、何が起きても……………怖くない……………」

彼女は、愛おしそうに俺の腕の中に納まり、静かに目を閉じた。

「……………アルたちには……………内緒だよ……………あの子たち、騒がしいから……………」

少しだけ悪戯っぽく微笑む彼女。

その顔は、真っ白に汚れ、ひどく乱れていたけれど。

今の彼女は、キヴォトスのどの少女よりも、美しく輝いて見えた。



二人の物語は、ここからまた、新しく、そして永遠に続いていく。

骸骨の紋章が刻まれたパーカーを再び羽織り、彼女はまた、便利屋としての日常へと戻っていく。

けれど、その内側には、決して消えることのない、二人だけの熱が、確かに宿っていた。

く完く

